

ニューヨークの中心街、マンハッタンにて  
第21回 国際視野画像学会に参加して

## 金沢開催決定、日本人ダブル受賞と まさに JAPAN WEEK



学会場(上)と入り口

2014年9月9日から12日にアメリカで開催された“Imaging and Perimetry Society : I P S (International Visual Field and Imaging Symposium : IVF IS)”に参加しました。

この学会は、視野をメインテーマとして基礎から臨床研究まで幅広く深く探求する国際学会で、1974年にフランス(マルセイユ)で開催されて以来、2年に一度、ヨーロッパ、アメリカを含む環太平洋の地域の持ち回りで行なわれています。



東京慈恵会医科大学  
准教授 なかの 中野 ただし 匡

### ディープな4日間

21回目となる今回の学会場はニューヨーク、マンハッタンのど真ん中、ブロードウェイにも徒歩圏内にあるニューヨーク州立大学 (State University of New York ; SUNY system) のキャンパスでした。世界中の視野や画像に関わる研究者たちが一堂に会する国際学会で、毎回、150人から200人程度の参加者があります。心理物理学の基礎研究から外来臨床のデータまで幅広い発表がなされ、いつも突っ込んだ質疑応答が行なわれます。学会期間中、全4日間を朝から晩までディープに共に過ごす、眼科関係では数少ない貴重な学会と言えます。

学会期間中に行なわれた Imaging and Perimetry Society (IPS) Business Meeting で役員の改選があり、IPS Vice President の任期を満了された松本長太先生 (近畿大学教授) が Perimetry の Group Chairman になられ、2002年から2008年まで Vice President を務められていた岩瀬愛子先生 (岐阜県多治見市・たじみ岩瀬眼科院長) が再び推挙されて



2018年IPS開催地の立候補のプレゼンをする岩瀬愛子先生

Garway Heath 先生と共に Vice President に就任されました。長年、Board Member であった山崎芳夫先生（日本大学准教授）が任期を終えられ、新メンバーとして杉山和久先生（金沢大学教授）が選出されました。

また日本では過去に、第3回（1978年）を故松尾治巨先生が東京で、第10回（1992年）を北澤克明先生が京都で、そして、第18回（2008年）を日本視野学会（JPS）会長の松本長太先生が主催され、奈良で開催されています。今回、2016年開催地のイタリア、ウーディネに続く、2018年の「第23回国

際視野画像学会」開催地の決議があり、岩瀬愛子先生の、まさにオリンピックのこもった立候補のプレゼンによって、めでたく日本（金沢）に決まりました。この場に立ち会えたことは日本人の1人としてとても名誉なことと思うとともに、この分野における日本の、世界やアジアでの位置づけを改めて実感でき、大変うれしく思いました。

### 興味深い新知見の数々

今回の学会では、12か国から口頭発表、ポスター発表を併せて56演題が一般講演として報告され、日本からは何と17演題が採択され、2位の主催国のアメリカ（9演題）を大きく引き離し、最も多くの発表がありました（表）。基調講演は、日本でも有



ポスター会場にて、前列左より、可見一孝先生、岩瀬愛子先生、加藤昌寛先生（東京慈恵会医科大学）後列左より、大久保真司先生（金沢市・おおくぼ眼科クリニック 院長）、私、岸田桃子先生（東京慈恵会医科大学）

名な Linda Zangwill 先生（Hamilton Glaucoma Center: University of California, San Diego）が所属施設の豊富な研究データを基に「緑内障の構造変化から考える臨床治験、評価の在り方」についてレビューされ、Austin Roorda 先生（University of California, Berkeley）が「Adaptive optics micropertimetry」について最先端の知識を情報提供されました。ま

た招待講演では、主催校の SUNY から Qasim Zaidi 先生が「早期緑内障の検出における神経節細胞レベルでの色順応と明順応変化」について、Jose Manuel Alonso 先生が「視覚情報処理におけるオン・オフ応答」について、Suresh Viswanathan 先生が「緑内障における神経節細胞の ERG」について、それぞれ最新の知見を解説され、いずれも興味深い内容で大変勉強になりました。



座長の朝岡亮先生（東京大学）

表. 第21回国際視野画像学会 国別演題数

|         | 演題数 |
|---------|-----|
| 日本      | 17  |
| アメリカ    | 9   |
| イギリス    | 7   |
| オーストラリア | 6   |
| ドイツ     | 5   |
| スペイン    | 3   |
| オランダ    | 2   |
| イタリア    | 1   |
| オーストリア  | 1   |
| その他     | 5   |
| 合計      | 56  |



Closing banquet

Bryant Park Grill (Official Dinner)にて



学会長とChris先生にボタンから元の視野計を当てていただくクイズ



松本長太先生の名司会で学会場は大爆笑

学  
の江浦真理子先生と沼田卓也先生による日本人ダブル受賞の快挙でした。9月初旬のニューヨークは、まさにJAPAN WEEKだったように思います。

学術的な充実度以外にも、本学会の際立った特徴として毎回、学会場以外でも凝った催し物が企画され、Social programの充実が参加者の大きな楽しみとなっています。今回は予想通りミュージカルが盛り込まれ、サーカスアクロバットな演出が繰り広げられる「PUPPIN」を、学会場から劇場まで徒歩で移動して一同で鑑賞しました。

Closing banquetも印象的で、毎回、

## IPSオープン

参加者が国別に舞台上上がり、母国の歌やパフォーマンスを披露することになっています。日本は松本先生率いる近畿大学の先生方が中心となっており、いつも大変手の込んだ企画をされるのですが、今回はちょうどテニスの全米オープンで錦織選手が決勝戦を戦った直後だったこともあり、それをもじってクイズ形式の「IPSオープン」を企画され、国別の出し物の中で最も大きな盛り上がりを見せました。

## JAPAN WEEK

あつという間の充実した4日間でしたが、極めつけは、学会の最後に最優秀演題2題に贈られるHeidelberg Awardが発表され、何と近畿大学の江浦真理子先生と沼田卓也先生による日本人ダブル受賞の快挙でした。9月初旬のニューヨークは、まさにJAPAN WEEKだったように思います。



Heidelberg Awardを受賞された江浦真理子先生(上)と沼田卓也先生

次回、2016年のウーディネは大きな国際学会が行なわれる機会が少ないと思われる、通好みの北イタリアの古都のようです。金沢で開催される次々回学会の前に、一度下見に行かれるのもよいのではないかと思います。

なお、本稿の供覧写真を多数提供していただいた本学会第1回から出席されている可児一孝先生(滋賀医科大学名誉教授)には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



学会場から見たニューヨーク